

少年サッカーライブ

「少年の、少年による、少年のためのサッカー」を理念に、横浜市青葉区を拠点に活動するあざみ野FC。2010年末に創立30周年を迎えるこれまでに千人近くの小学生を育てたクラブチームはいま、地域にしつかりじ根を下ろしている。

創設者で現在は理事長を務める村上源也さん(72)が、同市港北区日吉から引っ越してきたのは1978年。東急田園都市線あざみの駅の開業は前年5月だった。「駅前は夜になると歩く人もまばらで、周囲には赤土がむき出しの造成地が広がっていた」と当時を振り返る。

さんに声をかけた。「この新しい街にサッカーを普及させ、地域の活性化に役立てほしい」。転居後も日吉の名門チームの手伝いをしていた村上さんは、迷った末に決心した。「子どもたちにボールに触る楽しさを教えよう。時間はかかるかも知れないが、この街にサッカー文化を根付かせたい」。地域の人たち

と話し合いながら、拠点づくりを始めた。80年12月21日、開校して間もないあざみ野第1小学校のグラウンドで、サッカー経験のない5人の子どもたちが集まつた。みんなでボールを蹴つたこの時が、あざみ野FCの出発の日となつた。

テレビ局でスポーツ関係の仕

事をしていた村上さんは、サッカー界とのつながりも深い。往年の名プレーヤー、セルジオ越後さんの協力で翌年春にはクラブ主催の「セルジオ越後杯」を開催。田園都市沿線を中心に、入会希望者はだんだん増えていった。

「小学校や中学校の先生も、グラウンドの確保など活動を支えてくれた。地域の人たちの応援で、チームは急速に強くなつた」。99年と翌年には県代表として全日本少年サッカー大会に出場。県内強豪の一角に名を連ねるようになった。

「子どもたちの主体性を大切にし、それぞれの個性を育てる。周りのみんなも楽しめるスポーツに」という方針は、30年たつた今も変わらない。OBにはJリーグや大学チームの選手もいるが、多くが社会のさまざまな分野の第一線で活躍しているという。

街人ストーリー
田園都市から

創立30周年1000人を育てる



選手たちに声をかける村上源也さん(左端)=横浜市青葉区

ある日、以前からの顔見知りだった地元の小学校校長が村上

村上さんの夢は、中学校世代のレベルアップを図るためにサッカースクールのようなものをつくること。小学卒業後、Jリーグの下部組織などの一流クラブに進む子どもは、ほんの一握りしかいない。多くは公立中の

地域ぐるみの良さ



サッカー解説者
水沼貴史さん

水沼貴史さんに地域と少年サッカーについて聞いた。

——息子（J2栃木の水沼宏太選手）が小学生の時、あざみ野FCにお世話になった。その時に思ったのは「地域ぐるみ、家族ぐるみっていいなあ」ということ。地域のクラブにはJリーグの下部組織にはない温かさがある。

親だけでなく地域のいろんな大人が積極的にかかわることで、学校だけでは学べないことも学べる。学年を超えた絆もある。Jリーグの下部組織と比べて「どちらが良い」ではなく、いろんな環境があっていいし、両方ないと成り立たない。それが日本のいいところだと思う。

みづぬま・たかし サッカー指導者・解説者、1960年生まれ。日産自動車時代に日本代表。横浜F・マリノス元監督。横浜市青葉区在住。

部活動などで続けるが、一人ひとりのレベルアップを図ることで中学校全体の底上げにつなげたいという。
一所属チームはそれぞれの中学校でいい。より良い環境を用意してあげたい。小学生の時は目立たなくとも、いろんな才能を持つ子がいる。そんな『宝』を見つけたい。ただ、適当な練習場所がなかなか見つからないのが悩みです」
(日高敏景)